論　文

「見る／見られる」スノッブ
――サッカレーの『スノッブたちの本』におけるまなざしと女性表象――

岡本　佳奈

1. はじめに

ヴィクトリア朝時代の流動的な社会構造において、経済・階級的に不安定な立場[1]に置かれた中流階級は、「家庭重視主義」、「勤勉さ」、「信心深さ」といった階級的イデオロギーを発信することでその地位を同定しようとした。[2] しかし、他者の評価によって自らを定義づけようとする行為は、彼らの目に映る自分の姿を掌握しきれないという問題を孕む。ウィリアム・メイクピース・サッカレー（William Makepeace Thackeray, 1811-63）の『スノッブたちの本』（*The Book of Snobs*, 1848）において語り手が用いた言葉を引けば、行為者は「自分がどう見られるのか」という不安に呪縛され、「その本質が明らかとなる」恐怖におびえ続けることとなるのだ[3]。その不安や恐怖から逃れるべく、人々は体面と体裁を取り繕って自分を本来の姿以上の社会的存在として見せかけようとする。『スノッブたちの本』の語り手は、このように体面や外的な評価に固執する人々を「スノッブ」と表現し、その愚かさを諷刺している；“A Snob she is, as long as she sets that prodigious value upon herself, upon her name, upon her outward appearance, and indulges in that intolerable pomposity”（288）。

『イングランドのスノッブたち』（*Snobs of England*）は、1846年2月から1847年2月までの約1年間、雑誌『パンチ』（*Punch*, 1841-1992）[4]に掲載された作品であり、1848年に『スノッブたちの本』として出版された。本稿は、サッカレーが定義するスノビズムをヴィクトリア朝時代の人々、とりわけ中流階級における「見る／見られる」という関係、すなわちまなざしをめぐる問題との関連によって考察したい。

「視線」と本作を結びつける批評の先例として、リチャード・サーモン（Richard Salmon）は、本作が「社会的模倣と顕示的消費」（Salmon 46）の様々な例を活写していると述べている。また、キャサリン・ピーターズ（Catherine Peters）は、本作において「自分のエネルギーのすべてを羨望と物真似に費やす人々」の「顕示的消費の印」（Peters 126）が描かれていることを指摘している。しかし、いずれの批評も顕示性というテーマについてはこれらの言及を行うに留まり、社会的模倣や顕示的消費と不即不離の関係にあるまなざしという主題は、本作において詳細に検討されているとは言えない。本稿は、スノッブたちの「見られる」意識、そして、語り手のスノッブたちを「見る」意識という二種類のまなざしの表象を考察することによって、これまで注目されてこなかった本作の意義を再検討する。

『スノッブたちの本』におけるスノッブのイメージをつかむにあたって、本稿はまずその作品構造を概括したのちに、同作品が持つ「手引書」（etiquette book）のパロディとしての側面を考察する。手引書は、中流階級に正しいふるまいを教授するという点において彼らの「指針」となると同時に、指定されたマナーからの「逸脱」という恐怖も生み出した。『スノッブたちの本』は、手引書のスタイルを意図的に踏襲することで、この両義性を暴き、揶揄している。こうしたパロディ性を示すことにより、本作はヴィクトリア朝の人々が持つ他者からのまなざしに対する過敏さを諷刺する構造を持っていることを明らかにする。

続いて、他者のまなざしに振り回されるスノッブたちを諷刺すると同時に、本作は、そのようなスノッブたちを「観察する」語り手のスノビズムにも批判を投げかけていることに着目する。「自身もスノッブの一員たる者の手記」（By One of Themselves）という副題が示す通り、本作は、スノッブたちを諷刺する諷刺家もまたスノッブの一人に過ぎないという命題を持っている。これまで、この自己諧謔性は、作品の諷刺観における一貫性を削ぐものとして批判されてきた。しかし、本稿は、この特質によって作品内における「まなざし」が不安定化している点こそが意義深いということを主張したい。登場人物にとってのまなざしやその意識と風刺家としての語り手のまなざしは種類が異なるものではあるが、本作において連続性を持つ重要な問題であることを提示する。

最後に、このようなスノッブたちの視線への固執と語り手の不安定な立ち位置を示す例として、「クラブ・スノッブ」(Club Snob) におけるエピソードを取り上げ、そこに含まれるジェンダー的主題を検討する。同章の主要な登場人物、サックヴィル・メイン (Sackville Maine) は真面目な働き者であったが、語り手の誘いによってクラブ遊びを覚え、スノッブへと変貌していく。語り手は、読者に対してサックヴィルの愚かさを示すと同時に、自らがその引き金になったことを悔いる。しかし、この自省的な描写は一方で、サックヴィルの妻であるローラ (Laura) に対する語り手の加害性を覆い隠している。本作は、このような語り手のまなざしに潜む欺瞞を読者に対して複層的に示すことによって、ヴィクトリア朝時代におけるまなざしの力と複雑さを明らかにするテクストとなっていることを考察する。

2. スノッブを観察する

『スノッブたちの本』の語り手であるスノッブ氏 (Mr. Snob) は、『パンチ』で連載を行う作家という設定のもと、自らの執筆を神から授かった「使命」(260) と称し、様々なスノッブの振る舞いや生活ぶりを活写する。彼は「スノッブを見抜く目」(261) を持っており、「大いなる社会悪」(260) であるスノビズムを「発見し、救済する」(260) ためにこの連載を行っている。語り手の言葉におけるスノッブとは、階級が上位の者を賞賛し、下位の者を見下す人間のことである。

> You, who despise your neighbour, are a Snob; you, who forget your own friends, meanly to follow after those of a higher degree, are a Snob; you, who are ashamed of your poverty, and blush for your calling, are a Snob; as are you who boast of your pedigree, or are proud of your wealth. (493)

その言葉曰く、スノッブは実際よりも高い地位にある者として見られることを熱望する。『オックスフォード英語大辞典』(以下 *OED*) を紐解くと、スノッブはもともと「靴屋あるいは靴の修繕屋」(*OED*, def. n. 1a) を指し、その後「中層・下層階級に属する者」(*OED*, def. n. 3a, b) という意味で使用されるようになったとされている。職業、階級の貴賤に関わらず、好まし

くない人間性を持つ者としてのスノッブのイメージが生まれたのは19世紀半ばからのことであり、[5] 1848年、『イングランドのスノッブたち』におけるサッカレーの使用が初出となっている。サッカレーと親交の深かったアントニー・トロロープ（Anthony Trollope, 1815-1882）によれば、1829年にケンブリッジ大学の学生たちによって『スノッブ』（*Snob*）という雑誌が発行され、サッカレーはその編集に関わり作品を投稿していた。約20年の時を経てサッカレーがこの言葉を自身の連載のテーマとして選んだことには、在学中の経験が関係しているだろうとトロロープは記している（Trollope 6）。アン・モンサラット（Anne Monsarrat）も指摘する通り、スノビズム、すなわち虚栄に惹かれる人々と彼らに対する諷刺は、その後のサッカレーの著作に通底するテーマとなった（Monsarrat 35-36）。

スノビズムを持ちうる人間を「あらゆる階級の人々」（261）へと拡大したことは、この語が持つ意味合いに大きな影響を与えた。さらに、その語源に着目すると、サッカレーの使用を起点としてスノッブの性質に関する重要な変化が起きていることが分かる。サッカレーの使用後、OEDにおけるスノッブの特徴には、「社会的に重要な存在であると見なされたい」（*OED*, def. n. 3c）という表現が加わっている。自分がどのように「見なされるか」という問題が前景化するのは、人々の社会的地位が流動化し、他者による評価が一種の強迫観念となったヴィクトリア朝時代に特有の特徴だと言える。

商業・経済の急速な発展が進むヴィクトリア朝時代は、富の蓄積による成り上がりが可能となった時代であった。だが、真に成り上がりを成功させ、確固たる地位を築くことができる者は稀であり、上昇欲求を抱えつつも不安定な経済状況に置かれた大多数の中流階級は「大望と恐怖」（Punch 493）をその身に抱えることとなった。リチャード・オールティック（Richard Altick）は、『イングランドのスノッブたち』という連載によってサッカレーが中流階級の焦燥感を巧みに描出し「スノッブ」として定義づけたことを評価し、この連載が『パンチ』という雑誌の成功に貢献したと述べている。

> The social structure had been in place for centuries, but only now was an acute awareness of the hierarchy and the problems it engendered being felt.

> […] The result was what modern jargon would call a bad case of status anxiety, involving simultaneously a defensive hardening of one's present position in society and a desire to lower the barriers that stood in the way of one's ambition. What interested *Punch* in this mixed process of change and resistance was its end product, to which, mainly thanks to Thackeray, it affixed the permanent label of snobbery. (*Punch* 493)

つまるところ『スノッブたちの本』は、中流階級が持つ「社会的地位についての不安」(status anxiety) についての風刺なのである。本稿は、本作においてこの不安が表象されるにあたり、まなざしという主題が大きな役割を果たしていることに着目したい。

本作は44章から成っており、それぞれの章のタイトルには、百科事典さながらに語り手が観察する様々なスノッブの分類名がつけられている。この分類は、「軍隊スノッブ」(Military Snob)、「大学スノッブ」(University Snob) のように職業的なカテゴリーの場合もあれば、「パーティ好きのスノッブ」(Party Giving Snob)、「スノッブと結婚」(Snob and Marriage) のように、特定の状況下において発揮されるスノビズムに基づく場合もある。こうした多様なスノッブたちに共通するのは、いずれも、「他人からどのように見られるか」という価値観に固執するあまり、「実態よりも裕福で素晴らしい姿を取り繕う」(368) ことに必死になるという行動様式である。

例えば、18章から20章にかけて紹介される「パーティ・スノッブ」(Party Snob) については、そこで提供される会話や食事も含めてすべてが「とんでもないペテン」(374) だと表現される。パーティを主催する側は、他人をもてなすために金と労力をかけたうえで、自分たちの家の貧相な裏側が露呈しないかと「ひそかな恐怖と不安」(374) に襲われ続ける。自分の体面を保持するために神経をすり減らす人々に対し、語り手はもっと「気取らないやり方」(375) で過ごすことはできないか、と嘆く。また、8章に登場する「大都市スノッブ」(Great City Snob) の場合は、裕福な商人たちが高貴な「生まれ」(297) を手に入れるために、金をつぎ込み娘と貴族の結婚を画策する様子が「買い物」(297) の一種に譬えられる。しかし、父親たちの体面のためだけに結婚を強いられた当人たちは、「拒絶と障壁と屈辱」(298)

に満ちた苦痛の家庭生活を送らなくてはいけない。いずれの場合も、自らの希求する「理想的な自己」を他人の目に示すために何らかの対価を払うも、この消費行為により当事者たちの心の平穏や家庭の平和といった実質的な利益が喪失されるということを語り手は批判している。

このように、物事の実質的な価値よりも表層的な体面を重視する行動は、ソースタイン・ヴェブレン（Thorstein Veblen）が『有閑階級の理論』（The Theory of the Leisure Class, 1899）において「顕示的消費」（Conspicuous Consumption）と呼ぶ行為と類似する。[6] ヴェブレンは、新たに台頭する階級が自身の富を誇示するためには、その資産が「判読可能な文字で記される」（92）ことが必要とされたと述べている。

> The exigencies of the modern industrial system frequently place individuals and households in juxtaposition between whom there is little contact in any other sense than that of juxtaposition. One's neighbors, mechanically speaking, often are socially not one's neighbors, or even acquaintances; and still their transient good opinion has a high degree of utility. The only practicable means of impressing one's pecuniary ability on these unsympathetic observers of one's everyday life is an unremitting demonstration of ability to pay. (Veblen 92)

短期間で成り上がった中流階級は、自らの資産以外にその地位を保証するものを持たない。そして、その富を「共感の心を持たない観察者」（unsympathetic observers）である他者の目に明らかなものにするためには、それを可視化された物質という記号へと変転させる必要がある。ヴェブレンは、この観察者の目に自らの地位を視覚的なものにする唯一の行動が消費であると論じ、有閑階級が自らの行為の実質的な有用性よりも、他者の視線をとらえるか否かという観点を重視していることを明らかにした。顕示的消費を成り立たせるためには、その消費行為を目撃する他者の存在が不可欠である。『スノッブたちの本』においてもまた、スノッブは他者のまなざしを必要以上に気にかけることによってスノビズムに囚われていく。その消費行為の価値判断は、自分ではなく他者に委ねられているがゆえに、

スノッブたちはその評価の結果を案じて「ひそかな恐怖と不安」(374) を抱え続けるのだ。

3. 手引書のパロディとして

他者からの視線に対するヴィクトリア朝の人々の自意識の強さは、当時流行した多くの手引書における言説からうかがい知ることができる。ミシェル・フーコー (Michel Foucault) は、近代社会における監視体制を監獄という装置から検証し、公的な規律が個人の身体に内面化される過程を紐解いたが (Foucault 232)、『スノッブたちの本』は、いわゆる「親密圏」(private sphere) の交遊において個人がいかに他者のまなざしにさらされ、またその影響を受けているかを描いている。流動的な階層である中流階級にとって、自分たちの地位は生まれながらにして保有するものではなかった。レイモンド・ウィリアムズ (Raymond Williams) が述べたように、ヴィクトリア朝時代において、社会階級は「相続されるのではなく作り出されるもの」(Williams 61) へと変化した。自らの階級性を何らかの方法で獲得し、示す必要が生まれ、可能であればより上位のものとして体裁を取り繕ったり、見せかけたりする欲求やいわゆる虚栄心も喚起されたのである。

19 世紀に流行した数々のマナーに関する手引書は中流階級が共有したこのような体面を取り繕う必要性、ときによりよく見せかけたいという虚栄心を満たすものであった。貴族が代々の生きた伝統にのっとって上流階級の指標としてのマナーを修得するとすれば、一代で財を成す中流階級はそれぞれが「適正である」(proper) と考えるマナーを言説を通して新たな知識として獲得する必要があった。[7] クリストファー・クローゼン (Christopher Clausen) によれば、手引書は中流階級に行動規範を与え、階級に対する「帰属」(Clausen 405) 意識を生み出し、そこで得た学びは、ディナーをはじめとする社交の場で生かされた。レオノア・ダビドフ (Leonore Davidoff) は、19 世紀においてリスペクタブルな家族の楽しみとしての公的な場が減少し、代わってプライヴェートなディナーが「社交の頂点」(Davidoff 47) となったことを指摘している。個々の立場をアピールする方法として私的な社交が重んじられるほど、そういった場におけるふるまいを教示する手引書の必要性は高まった。さらに、手引書の内容はテーブルマナーなど

の具体的で些末な行動に留まらず、サラ・スティックニー・エリス（Sarah Stickney Ellis, 1799-1872）が著した『イングランドの女性たち』（*The Women of England*, 1838）のように、淑女としての在り方そのものを指南する場合もあった。ナンシー・アームストロング（Nancy Armstrong）が指摘するように、手引書は女性イデオロギーを教化し、淑女の振る舞いを固定化するうえで重要な役割を持ったのである（Armstrong 1）。

興味深いことに、こうした手引書は中流階級が他者からの視線に耐えうるリスペクタブルな存在となる手助けとして生み出されたにもかかわらず、むしろ、彼らの状況を悪化させる側面もあった。量産されるエチケットやマナーによって、中流階級としてのふるまいが詳細に定義づけられるほど、彼らがリスペクタブルな存在となるための審査基準が増え、彼らを縛る視線は強固なものになっていった。[8]

ジョン・サザーランド（John Sutherland）やキャサリン・ピーターズといった批評家は、本作の連載当時のタイトル、『イングランドのスノッブたち』がエリスの著作、『イングランドの女性たち』を模していることから、本作は手引書のパロディ的要素を持っていることを指摘している。[9] しかし、本稿は、『スノッブたちの本』と当時の手引書の関係性は単なるタイトルの近似に留まらないことを指摘したい。『スノッブたちの本』の語り手は、虚栄にまみれた中流階級の正体を諷刺によって明らかにしようと試みる。マナーによって中流階級にリスペクタビリティを付与する手引書に対して、本作は他者の視線を意識して取り繕った体面をはぎ取り、「真実」（261）を明らかにするという命題を遂行する。そればかりか、読者に「どう行動すべきか」という前向きな指針を授ける手引書に対し、本作は、スノッブたちの行動様式を解剖し、「このような行動をとってはいけない」という否定的な指針を授けることで読者の不安感をあおるという構造を持っている。実のところ、手引書も表層を取り繕う指針を創り出すばかりであり、手引書にしたがって体裁を整えたからといって、人々が分相応の階級以上になれるわけではなく、彼らが行き着く姿はスノッブに他ならないことになる。中流階級は自分たちが潜在的に抱える階級不安を手引書の教示によって解決しようと試みたが、この試みはそもそも無謀なものである。本作は中流階級の不安を具象化するだけでなく、手引書のパロディという形式をとる

ことによって、彼らのこの試みの失敗までをも主題化しているのである。

これまでの検討により、外面を整えることに囚われた人々の愚かな行動が本作の批判対象であることが分かった。ここで着目したいのは、このように可視化された階級指標としてのマナーや体裁が問題となる本作において、語り手の「見る」行為が重要な意味を担っているということである。作品冒頭で「スノッブを見抜く目」(261) を持つことが示される通り、本作の語り手は洞察力を持った観察者としての役割を持つ。「見る／見られる」関係性には人をスノビズムへと引き込む力が備わっているという本作の主張を鑑みれば、語り手の「見る」行為もまた彼自身をスノビズムから切り離せないものとして位置づけてしまうことになる。つまり、本作の語り手は、人々を断罪する風刺家というありきたりの立ち位置にとどまらず、自らもまたスノッブの一人として断罪される対象に含めてしまっているのである。

思い起こすべきなのは、本作の副題「自身もスノッブの一員たる者の手記」が示すように、語り手自身もスノッブの一人であり、語り手は自分を含め誰一人「スノッブという状態から逃れる」(282) ことはできないと主張していることである。次節では、語り手のスノビズムを分析するために、「クラブ・スノッブ」のエピソードを検討する。諷刺対象に向けられる語り手のまなざしを考察することで、彼が抱えるスノビズムの構造が明らかとなる。

4. 語り手のスノビズムとサックヴィルの転落

本作の副題「自身もスノッブの一員たる者の手記」が示す通り、語り手は人々のスノビズムを揶揄するだけでなく、自分自身もスノッブの一員であることを認めるという自己諧謔により、読者の笑いを誘う。彼の言葉によれば、他者を「性急に、あるいは下劣に品評する」(261) ことはスノッブ的な行いであり、その点において、語り手自身のスノッブ観察もまたスノビズムとしての要素を備えているのだ。さらに、語り手は、「使命」(Work) として開始したスノッブ談議に対して、次第に彼自身の好奇心を持って取り組むようになる。連載に情熱を持ち始める語り手はより見るに値するものを求め、そもそも、スノッブが根絶してしまえば彼自身もその存在意

義を失い、失職してしまうということに気づく；“But why hope, why wish for such times? Do I wish all Snobs to perish? Do I wish these Snob papers to determine? Suicidal fool, art not thou, too, a Snob and a brother?”（448）。

これらの場面において語り手が「スノッブ」と呼ぶものは、これまで本稿が論じてきたスノビズム、すなわち「他者からどう見られるか」という問題を過剰に気にかける中流階級のまなざしを巡る問題とはやや意味合いが異なる。しかし、語り手の言葉によれば、被観察者がスノッブであることと同時に、他者を観察し、「審議する」こともまたスノッブ的行為であり、その限りにおいて語り手も「見る／見られる」力学の中に取り込まれたスノッブの一員である。語り手という本来特権的な視点の持ち主が登場人物たちと同じくスノビズムの虜となるという構造の皮肉さにこそ本作の主眼があると言えよう。

他者からの視線を過剰に気にかけること、そして、他者をあさましく観察することが本作の諷刺対象であるとして、これらの行為を「見る」諷刺家もスノッブの一員であるとするならば、本作の諷刺的意義は霧消してしまうようにも思える。出版当時、自分をスノッブの一人として定義する語り手の態度は諷刺家としての権威を損ねるとして批判を招いた。[10] しかし、ゴードン・N・レイ（Gordon N. Ray）は、こうした自己批判を含んだ風刺にこそ、サッカレーが生み出す語り手の人間らしさが表れていると評価している。

> The one supreme and even sacred quality in Thackeray's work is that he felt the weakness of all flesh. Wherever he sneers it is at his own potential self. When he rebukes, he knows it is self-rebuke; when he indulges, he knows it is self-indulgence. This makes him less effective for a fierce war against exceptional and definable abuses. […] Dickens, or Douglas Jerrold, or many others might have planned a Book of Snobs; it was Thackeray, and Thackeray alone, who wrote the great subtitle, “By One of Themselves.” (Ray 27)

本稿はこの評価を継承しつつ、レイの分析においてはやや不明瞭な、本作が描く「人間の弱さ」（the weakness of all flesh）というものをより具体的

に検証したい。本作の語り手は、スノッブたちを特権的な立場から観察するだけでなく、彼らが翻弄されるまなざしの引力に語り手自身も取り込まれる姿を見せることによって、自分もスノビズムを抱える人間であることを示している。さらに本稿は、語り手が「自分もスノッブである」と宣言する一方で、自分のスノビズムをすべて客観視できているわけではないということに着目したい。ほかのスノッブたちと同じく、自分の愚かさを把握しえないという点にこそ、語り手の「弱さ」が表れていると言える。

本作において語り手はスノッブたちを一般的なイメージから品定めする場合もあれば、時には語り手自身の友人たちに見出されたスノビズムについて語る場合もある。作品の最後のエピソードの主人公として紹介されるサックヴィルも、語り手の友人の一人である。また、サックヴィルに関する出来事は、作品全体で最も紙面の割かれたエピソードであると同時に、作品最後のスノッブ譚であるという点において、重要度の高い物語であると言える。

本章、「クラブ・スノッブ」が批判するのは、会員制のクラブ・ハウスに入り浸り、家庭や仕事を顧みずその趣味に耽溺する男性たちである。語り手は、女性たちに対してこうした男性の悪癖を知っておくようにと語りかけてエピソードを始める。サックヴィル・メインもこの悪癖に染まった一人だが、クラブに足を踏み入れる前の彼は、語り手の知る限り最も「快適さに満ちた」(474) 家庭を持つ男性だった。サックヴィルは、炭鉱業を生業とする経営者として、美しい妻、ローラと慎ましい中流階級が多く住むテムズ川南岸郊外のケニントン・オーバル (Kennington Oval) にある一軒家に暮らしていた。

> His cottage was a picture of elegance and comfort; his table and cellar were excellently and neatly supplied. There was every enjoyment, but no ostentation. The omnibus took him to business of a morning ; the boat brought him back to the happiest of homes, where he would while away the long evenings by reading out the fashionable novels to the ladies as they worked; or accompany his wife on the flute (which he played elegantly); or in any one of the hundred pleasing and innocent amusements of the domestic

> circle. Mrs. Chuff covered the drawing-rooms with prodigious tapestries, the work of her hands. Mrs. Sackville had a particular genius for making covers of tape or network for these tapestried cushions. (474)

ここに描出される一家の様子には、「居心地の良さ」(comfort) をはじめとするヴィクトリア朝における中流階級の美徳が詰まっている。[11] 夫婦は真面目な働き者であり、サックヴィルが若いころ贈ったという「バイロンやムーアの詩」(475) は、2人が金銭的な事情ではなく愛に基づいて結婚に至ったことを示している。そして、「あらゆる楽しみがあるが、虚飾はない」(There was every enjoyment, but no ostentation) という表現には、虚栄に囚われたスノッブたちの暮らしとの明確な対比が見られる。

こうした家族の慎ましい幸福は、サックヴィルのクラブ遊びの始まりとともに崩壊する。19世紀半ば、流行の最盛を極めていた会員制のクラブは、男性たちにとって単調な家庭生活からの逃避地として機能した (Cross 107-108)。だが、語り手を含む友人たちの誘いにのってサコーファガス・クラブ (Sarcophagus Club) に入会し、喫煙、ビリヤード、トランプなどの悪癖を覚えたサックヴィルは、かりそめの楽しみとしてのクラブ遊びに耽るにとどまらず、その魅力におぼれていく。「楽園のように美麗な」(479) クラブのきらびやかさに魅了された彼は、勤勉さを失い仕事と家庭をないがしろにするようになる。クラブ仲間の洗練された上流趣味に憧れた結果、サックヴィルは控えめで質実な郊外生活を「恥じる」ようになり (483)、高級住宅地として開発されて間もないピムリコ (Pimlico) への引っ越しを強行する。家計はますます圧迫され、慎ましく幸せだった家庭は表面的には豪華な愛のない家へと変貌してしまう。

> The furnishing of the house was not done without expense. And, ye gods! what a difference there was between Sackville's dreary French banquets in Pimlico, and the jolly dinners at the Oval! No more legs-of-mutton, no more of "the best port-wine in England;" but entrees on plate, and dismal twopenny champagne, and waiters in gloves, and the Club bucks for company—among whom Mrs. Chuff was uneasy and Mrs. Sackville quite silent. (484)

食卓の内容は一変し、招かれざる客であるクラブ仲間、急拵えの給仕が加わった家庭には、以前のようなにぎやかさ、楽しみはない。食卓に生じる変化、そして、家族の楽しみを生んでいた書物、楽器といった娯楽物の喪失という対比が家族の変貌ぶりを視覚的に明らかなものとして提示する。[12] さらに何よりも印象的な変化は、続く場面において、夫の帰りを健気に待ち、寝室で一人子供たちを寝かしつける「哀れで善良な優しいローラ」(484) の姿である。

ローラは「貞淑で育ちの良いイギリス人女性の精神」(475) を持つがゆえに、愚かな夫に反発することも子供たちを見捨てて家庭から飛び出すこともできない。妻、母としての責務に囚われ自発的には何もできないローラの様子は、主体性を奪われた女性の空虚さを体現している。ローラに備わる女性としての美徳が必ずしも最良の結果を導かないという描写は、当時のジェンダーイデオロギーにおける理想の女性像を直接的に批判することは避けつつ、こうした女性像への信望が持つ負の側面を浮かび上がらせる。[13]

5. 語り手は何を「見て」いるか

では、ここまでの変貌を引き起こした要因は何だろうか。本エピソードにおいても「見ること」はサックヴィルをスノビズムに引き込む重要なファクターとなっている。初めてクラブに足を踏み入れた氏は、建物のきらびやかさもさることながら、応接室の鏡に映る自分の姿に心を躍らせる。彼は、上流社会を目にするだけではなく、上流社会に足を踏み入れた自分自身を直視することによって、スノビズムに囚われてしまうのである。

> How they did admire the drawing-room hangings, (pink and silver brocade, most excellent wear for London,) and calculated the price per yard; and revelled on the luxurious sofas; and gazed on the immeasurable looking glasses. 'Pretty well to shave by, eh?' says Maine to his mother in-law. (He was getting more abominably conceited every minute.) […] What I like to see, and watch with increasing joy and adoration, is the Club men at the great looking-glasses. […] What a deal of vanity that Club mirror has reflected, to be sure! (481-482)

前述したヴェブレンの議論によれば、顕示的消費行動の成立には観察者の存在が重要な役割を果たしていた。この場面において、サックヴィルは鏡を通して自らの理想的な姿を「見る」ことで自分自身の観察者となり、その顕示的消費衝動を引き起こしているのだ。

さらに興味深いことに、本エピソードにおいて「見る」ことの魔力に囚われているのはサックヴィルだけではない。語り手は、鏡に見入るサックヴィルのようなクラブ男たちを「見るのが好き」(like to see) だと述べる。語り手は、サックヴィルをクラブに誘った理由として、義母から見下されるサックヴィルが不憫で彼に相応の地位と気晴らしを与えたかったのだと主張するが (478)、その表向きの理由の背後には、自分の観察対象をより興味深い境遇に引き入れたいという隠れた欲望がなかっただろうか。[14]

語り手が抱くサックヴィルへの関心は、彼の当初の主張と見比べた時、よりいっそう興味深いものとして浮かび上がる。彼のスノッブ観察者としての出発点は、世の中にスノビズムという悪徳を知らしめる使命である。「スノッブを見抜く目」とともにその使命を果たすことが彼の観察行為を単なるスノビズムと区別する正当性であった。しかし、この場面において、語り手の責務としての観察行為と自分の興味に基づく観察への欲望は未分化なものとして提示され、諷刺家としての立場は混乱している。

ただし、このようなスノッブたちへの窃視的欲望に関しては、語り手はある程度自覚的であり、他者を審理する行為がスノッブ的であることを認めている。だとすると、サックヴィルをスノッブへと変貌させる契機と考えられる語り手の「見る」欲望は、彼の自己諧謔の一部として、すなわち、語り手もまた卑俗な人間の一人なのだという自己暴露として、本作の命題に初めから組み込まれている。では、本作の語り手は自分の弱さを自認しているという点において、本作に登場するスノッブたちとは異なる特権的な視点を有しているのだろうか。本稿はここで、語り手が読者に対して開示するこれらのスノビズムに加えて、語り手自身も認知しない、あるいは認知しているとしてもその事実に触れようとしない、もう一つの見る欲望が存在することを指摘したい。

語り手は、本エピソードの冒頭において、メイン夫妻と知り合うきっかけを以下のように語る。

> It was at a ball at the house of my respected friend, Mrs. Perkins, that I was introduced to this gentleman and his charming lady. Seeing a young creature before me in a white dress, with white satin shoes; with a pink ribbon, about a yard in breadth, flaming out as she twirled in a polka in the arms of Monsieur de Springbock, the German diplomatist; with a green wreath on her head, and the blackest hair this individual set eyes on – seeing, I say, before me a charming young woman whisking beautifully in a beautiful dance, and presenting, as she wound and wound round the room, now a full face, then a three-quarter face, then a profile – a face, in fine, which in every way you saw it, looked pretty, and rosy, and happy, I felt (as I trust) a not unbecoming curiosity regarding the owner of this pleasant countenance, and asked Wagley (who was standing by, in conversation with an acquaintance) who was the lady in question? (473)

語り手は、ローラの「可愛らしく、血色よく、幸せな」(pretty, and rosy, and happy) 様子を見ることによって彼女への興味を抱き、その素性を友人に尋ねる。語り手が夫妻に近づいたきっかけは、ローラの可視的な美しさによって引き起こされた好奇心であることが分かる。

こうした語り手の背後にある欲求に着目すると、一家の転落を同情しながら描写する彼のまなざしにはどこか偽善めいたものが浮かぶ。ローラが夫の愚行に文句ひとつ言わず耐え忍ぶ様子を語り手は嘆くが、その態度はメロドラマ的で大げさである (484)。

一家の不幸が彼の興味によって引き起こされたものだとするならば、そのわざとらしい同情のそぶりは欺瞞に満ちている。そして、このような責任の一端を彼自身も理解している。だからこそ、彼は、帰国後の不憫なローラの姿を窃視的に描写することはできても、彼女の「恨みと悲しみ」(reproach or sadness) を直視することはできず、夫妻を呼び止めようとしない；“When we meet, he crosses over to the other side of the street; I don’t call, as I should be sorry to see a look of reproach or sadness in Laura’s sweet face” (486-487)。

ローラの美しさを嬉々として描写する一方でこうした苦しみを直視しな

い語り手の態度には、特権的な立場から彼女をヒロインとして対象化しつつ、その人間的な痛みに寄り添わない身勝手さが浮かぶ。本章の締めくくりとして、語り手は、クラブというものの在り方、そしてその利用者である男性たちを正道に戻したという点において、この連載は無益ではなかっただろうと読者に呼びかける。

> Snuffler no longer publicly spreads out his great red cotton pocket-handkerchief before the fire, for the admiration of two hundred gentlemen; and if one Club Snob has been brought back to the paths of rectitude, and if one poor John has been spared a journey or a scolding – say, friends and brethren if these sketches of Club Snobs have been in vain? (487)

確かに「クラブ・スノッブ」としてのサックヴィルはもういない。だが、一人のスノッブが生まれ元の生活に戻る過程において、ローラという被害者が生まれ、あまつさえその目で彼女を審美的な対象として消費したことに語り手は触れようとしない。この点において、語り手のローラに対する欲望は、あくまで秘匿されている。

しかし、本作はこのような語り手の態度を無批判に提示するわけではない。むしろ、語り手の表向きの主張と、それに必ずしも合致しない行動、とりわけローラに対するそのまなざしが示されることによって、読者はこれらに批判的な読みを施すことが可能となる。本作の語り手は「自身もスノッブの一員たる者」であるという自覚を持ち、「見ること」が持つ甘美な引力の前では、特権的な諷刺家としての地位を保持できないことを体現している。これにより本作の諷刺的意義は減少するが、一方で「見る／見られる」欲望としてのスノビズムからは誰も逃れられないという命題を証明することに成功している。そして、語り手の「見る欲望」としてのスノビズムは、そのすべてが開陳されるわけではない。ローラの例にあるように、語り手の自己暴露が不完全であるということは、「私もスノッブである」という自己客観視が、意識的にせよ無意識的にせよ、失敗していることを示している。語り手はスノビズムから逃れられないばかりか、自らのスノビズムを認めることによってその世界観をコントロールする試みも破綻して

いる。本作は、「見る」ことの引力に囚われ、諷刺家としての特権性を確保できない語り手の姿を複次元的に示しており、この提示によって、いかなる人物も「スノッブであることからは逃れられない」(282) という本作の主題が証明されていると言える。

6. 終わりに

『スノッブたちの本』は、ヴィクトリア朝時代における中流階級の「見る／見られる」意識の高まりを手引書のパロディという手法で諷刺している。そして、本作は、このようなスノッブたちから距離を置いてその愚かさを揶揄するわけではないという点において意義深い。諷刺家としての語り手もまた「見る」ことに引き付けられ、過ちを犯すスノッブの一人であるという自己諧謔性が作品の骨子である。さらに本稿は、「クラブ・スノッブ」における女性表象を足掛かりに、語り手が自覚しない、あるいは自覚しつつも読者に提示しないさらなるスノビズムがテクストに包摂されている可能性を示した。これにより、「見る／見られる」という関係が持つ不安定さ、すなわち、たとえ語り手であっても特権的な「見る」主体にはなりえないという作品構造によって、本作の主題が遂行されていることを考察した。

＊本稿は日本ヴィクトリア朝文化研究学会第19回全国大会（近畿大学、2019年11月23日）での口頭発表に大幅に加筆・修正を加えたものです。発表時に頂いたご意見、査読者からのご指摘にこの場で感謝申し上げます。

註

1　リチャード・オールティック（Richard Altick）は、ヴィクトリア朝時代を「社会的流動性の時代」（*Victorian People and Ideas* 17）と表現し、サッカレーをはじめ、ディケンズ、トロロープといった作家たちが「不安、嫉妬、不確実性といった精神的な沈滞」（*Victorian People and Ideas* 17）に関心を持っていたとしている。また、アマンパル・ガルチャ（Amanpal Garcha）は、ヴィクトリア朝時代に人々が抱える「不安定さ」（instability）によって、プロットがないその断片性ゆえに読者に安定感を与えるスケッチ文学への需要が高まり、ディケンズ、ギャスケル、サッカレーの執筆キャリアの初期における作品傾向に影響を与えたと論じている（Garcha 118）。

2　ローレンス・ストーン（Lawrence　Stone）は、イギリスにおける家父長制への信望という傾向が 16 世紀から 19 世紀にかけて幾度か発生しており、その発生要因はいずれも「社会的および政治的な危機感、つまり、社会的ヒエラルキーや政治秩序の構造全体が危険にさらされているという恐怖」（Stone　577）と関連していると指摘している。また、フランコ・モレッティ（Franco Moretti）は、ヴィクトリア朝時代のテクストには道徳的価値観を含んだ形容詞が多用されており、「福音主義的なキリスト教精神、古き良き時代のイメージ、労働の倫理」（Moretti 130）といったものを可視化させる「道徳化」（Moretti 130）の過程こそヴィクトリア朝時代の特徴であるとしている。

3　William Makepeace Thackeray, “The Book of Snobs”, 374. 以下、引用の都度、括弧内に頁数のみで記す。

4　雑誌『パンチ』にとって、『イングランドのスノッブたち』は単に人気連載となったというだけではなく、政治的ラディカリズムから中流階級に好まれる穏当なユーモアへの雑誌の方向転換に貢献した作品であった。松村昌家も指摘する通り、サッカレー作品における「社会を『虚栄の市』に見立てて、それを彩るさまざまな俗物どものうごめきを冷静に観察し、笑いを引き出す質」（松村 252）は、『パンチ』の新たな方向性の確立に大きな役割を果たした。

5　フランスにおける「スノビズム」の語源を紐解いたデュ・ピュイ・ド・クランシャンもまた、「スノッブ」という呼称は、19 世紀初頭、ケンブリッジ大学の裕福な子息である学生たちが大学外の者、とりわけ貧しい平民に対して用いはじめ、その言葉が指し示すものはサッカレーによって拡大されたとしている（Clinchamps 21）。

6　ロジャー・メイソン（Roger　Mason）は、「顕示的消費」という語句を正式に提唱したのはヴェブレンであるが、ヴェブレンに先駆けてジョン・レイ（John Rae）が『新原理』（*Statement of Some New Principles on the Subject of Political Economy, Exposing the Fallacies of the System of Free Trade, and of Some Other Doctrines Maintained in the ‘Wealth of Nations’*）において「ステータスに動機づけられた買い物や、見せびらかし行為の中に含意されている社会的顕示性の重要性」（Mason 42）をすでに示していることを指摘している。

7　パトリシア・ブランカ（Patricia Branca）によれば、こうした振る舞い方を手引書から学ぶことはとりわけ女性にとって重要であった。というのも、中流階級の娘たちが必ずしもマナー学校の類に通うことができるとは限らず、家庭で教育を行うにあたり、「教育に関する分析的研究の必要性」（Branca 254）が高まったからである。

8　川本静子は、家庭イデオロギーと手引書の関係に着目し、両者は「一方が

他方の原因でもあり結果でもあるというウロボロス的関係にある」（川本 67）としている。川本は、手引書がイデオロギーを教示することによって家庭の天使としての素養が完璧なものになるわけではなく、イデオロギーを女性の脳にインプットするほどにそれを完遂するメソッドが必要になるという「循環運動」（67）が生まれていたと論じている。

9　ピーターズは、本作が当時流行した『イングランドの女たち』シリーズの「パロディ」（Peters 126）であることを指摘しており、サザーランドは、サッカレー自身が本作のタイトルをエリス夫人の著作からの「コミカルな引用」（Sutherland xi）として認識していたと述べている。

10　M・ホジャート（M. Hodgert）は、諷刺家にとって重要なのは、諷刺対象から「審美的な距離」（Hodgert 32）をとることだと述べている。

11　モレッティは、ヴィクトリア朝時代におけるブルジョワ階級のアイデンティティを形成する「道徳的」な形容詞の一つとして「快適な」（Comfort）を挙げている（Moretti 44）。

12　そもそも、様々な事物に彩られた一家の団欒の様子それ自体が中流階級の不安を逆説的に暗示するものであるともいえる。ルーシー・ワースリー（Lucie Worsely）が指摘するように、中流階級の家に細かな事物が充溢する様子は、「彼らの地位に対する不安と執着」(Worsely 185) であるともいえる。

13　女性の抑圧、とりわけ金銭的、社会、教育的な不平等に対して、サッカレーは繰り返し批判的な描写を行っており、「クラブ・スノッブ」における女性たちに対する語り手の同情的な眼差しについては、ミカエル・クラーク（Micael Clarke）によって論じられている（Clarke 59-62）。

14　サックヴィルが居を構えていたケニントン・オーパルが郊外、すなわち「サバービア」（Fishman 38）であることは着目に値する。郊外住宅地は、とりわけ 19 世紀末において、安価で清潔な土地に理想の家庭を築くことができるために下層中流階級のユートピアとして機能した。と同時に、中流階級の生活様式への憧れと限界を示す点において彼らを「揶揄し、嘲笑する格好の材料」（新井 92）ともなった。サバービアへの中流階級の脱出が本格的に始まるのは 1860 年代以降ではあるが、本作の語り手も、メイン一家の家庭生活を褒め称えているように見えて、そこには初めから彼らを揶揄するまなざしが含まれている。

引用文献

Altick, Richard Daniel. *Punch: The Lively Youth of a British Institution.* 1841-1851. Ohio State UP, 1997.

---. *Victorian People and Ideas.* WW Norton and Company, 1973.

Armstrong, Nancy, and Leonard Tennenhouse ed. *The Ideology of Conduct.* Routledge, 1987.

Branca, Patricia. *Silent Sisterhood: Middle Class Women in the Victorian Home.* Croom Helm, 1975.

Clarke, Micael M. *Thackeray and Women*. Northern Illinois UP, 1995.

Clinchamps, Philippe Du Puy De. Le *Snobisme*. Presses Universitaires de France, 1964.［『スノビスム』横山一雄訳、白水社、1981年。］

Cross, Nigel. *The Common Writer: Life in Nineteenth-Century*. Cambridge UP, 1985.

Davidoff, Leonore. *The Best Circles: Society, Etiquette and the Session*. Croom Helm, 1973.

Ellis, Sarah Stickney. *The Women of England: Their Social Duties, and Domestic Habits*. 1838. Reprinted, Cambridge UP, 2010.

Fishman, Robert. Bourgeois *Utopias: The Rise and Fall of Suburbia.* Basic Books, 1987

Foucault, Michel. *Discipline and Punish: The Birth of the Prison*. Penguin, 1979.

Garcha, Amanpal. *From Sketch to Novel: The Development of Victorian* Fiction. Cambridge UP, 2009.

Mason, Roger. *The Economics of Conspicuous Consumption: Theory and Thought since* 1700. Edward Elgar, 1998.［『顕示的消費の経済学』鈴木信雄、高哲男、橋本務訳、2000年、名古屋大学出版会。］

Monsarrat, Ann. *An Uneasy Victorian: Thackeray the Man*. Dodd, Mead, 1980.

Moretti, Franco. *The Bourgeois: Between History and Literature*. Verso, 2014.

Peters, Catherine. *Thackeray's Universe: Shifting Worlds of Imagination and Reality.* Oxford UP, 1987.

Ray, Gordon Norton. "Thackeray's *Book of Snobs.*" *Nineteenth-Century Fiction* 10.1. 1955, pp. 22-33.

Salmon, Richard. *William Makepeace Thackeray*. Horndon, 2005.

Stone, Lawrence. *The Family, Sex and Marriage in England* 1500-1800. Penguin, 1979.

Sutherland, John. Ed. *The Book of Snobs*. U of Queensland P, 1978.

Thackeray, William Makepeace. "The Book of Snobs." 1846-47. *The Oxford Thackeray with Illustrations* Ⅸ. Oxford UP, 1908, pp. 258-493.

Trollope, Anthony. *Thackeray*. 1879. Reprinted, AMS P, 1968.

Williams, Raymond. *Keywords: A Vocabulary of Culture and Society*. Fontana, 1988.

Veblen, Thorstein. *The Theory of the Leisure Class*. Houghton Mifflin, 1973.

Worsley, Lucy. *If Walls could Talk: An Intimate History of the Home*. Bloomsbury, 2011.

新井潤美『階級にとりつかれた人びと—英国ミドル・クラスの生活と意見』中公新書、2001年。

川本静子「清く正しく美しく—手引書の中の〈家庭の天使〉像」松村昌家、川本静子、

長島伸一、村岡健次編『女王陛下の時代　英国文化の世紀３』、研究社出版、1996年、53-85頁。
松村昌家『『パンチ』素描集』岩波文庫、1994年。

―東京大学大学院

Summary

Snobs "Looking/Being Looked At": The Gaze and the Female Representation in *The Book of Snobs*

Kana Okamoto

The Book of Snobs (1848) by William Makepeace Thackeray (1811–1863) helped form the concept of snobbery. This paper examines such conception through paying attention to the theme of "looking/being looked at" in the text.

In the mid-nineteenth century, the middle class experienced a significant change in status. Rapid industrialization made it possible to ascend in society through capital accumulation, but in reality, it was difficult to actualize "rags to riches" stories. Nevertheless, the desire to succeed in society increased, resulting in the growth of conspicuous consumption, and therefore, the rise of a new social category, the snobs.

Although *The Book of Snobs* satirizes snobs, who are obsessed with how others regard them, the work also criticizes the snobbery of the narrator who "observes" and "judges" snobs. As the subtitle "By One of Themselves" suggests, the narrator who satirizes snobs is also one of them. This self-humor has been criticized previously as reducing the coherence of the work as a satire, but this paper argues that this circular self-irony is significant because it represents the loss of absoluteness of the "looking" subject and the instability of the gaze.

As an example of the snobs' fixation on the gaze and the narrator's precarious position, "this paper examines the chapter "Club Snobs" and the female representation. Its main character, Sackville Maine, is an earnest middle-class man at first but is eventually transformed into a snob

at the narrator's invitation. The narrator makes a spectacle of Sackville's foolishness and at the same time, exhibits regret that he has triggered it. However, this self-reflective gesture masks the narrator's perpetration of snobbery against another victim, Sackville's wife, Laura. By illustrating the multiple layers of deceit lurking beneath the narrator's "gaze," this work reveals both the instability and power of the "gaze" in the Victorian era.